
GAME

太智愛 陽子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GAME

【Nコード】

N77760

【作者名】

太智愛 陽子

【あらすじ】

彼女たちの話を偶然に聞いた僕。それは僕の彼女の席を狙っているというものだった。君がいつたいどんな作戦で来るのだろう。たつぷり見物させてもらうことにするよ。始めは面白がって余裕だったはずなのにどういいうわけか僕ほうが彼女に嵌っている気がするの
は気のせい？

1・偶然の会話

今日は事務処理に追われている。

先週からずっと営業で外回りばかりしていたのでたまりにたまった書類の山。

電話で済ませていた発注も今日中に仕上げなくてはならない。

人に任せればいい仕事も結局、後で確認し、手直ししたくなる事が分かってからほとんど自分の手でするようにしている。

夜には社内の飲み会があつて、結構気晴らしになるから欠席したくない僕は必死にパソコンに向かつていた。

何とか立て込んでいた仕事に区切りがついたので一息つけようと休憩室へ向かった。

3階と7階にある休憩室、気分転換も兼ねて迷わず7階へ。

ここは主に会議室が並んでいる。

別の課との集まりやお偉いさん方の重要な会議、来客者の対応などさまざまな話し合いがなされている。

入社した当初は6階にあつた休憩所が移動になる時、そんなフロアで一息つけるのかと違和感を覚えたが理由を聞いて納得した。

最近の禁煙ブーム、昔は特に男性は仕事とタバコがセットのようにもなっていたが最近では随分と男性の禁煙者も増えた。

街でも分煙が当たり前になってきている。

その為うちの会社でも仕事スペースでは吸えない事になり、かと言って来客者に喫煙を断る事も出来ない時もあるせいで防音設備と大幅に入り組んだ部屋割に改装された上、休憩室も設置された。

エレベーターを降りて二回曲がると休憩室だ。

「東城さんがまた彼女と別れたらしいよ。」

すぐそばまで来た時、自分の名前が耳に入り思わず足が止まった。

怖いもの見たさで僅かに足を進めると庶務課の角田 円末の姿が見えた。

何人かで話しているようだがそれ以上前に進むと見つかってしまい
そうでそこで息をひそめて、つい聞き耳を立てた。

「そうなんだ、今日の飲み会は楽しくなりそう。」

角田さん以外誰がいるのか分からないが話のタネになっている事は
確かだ。

僕が彼女と別れると女の子たちが寄って来て、あまり間を置かず次
の彼女が出来る。

今回はしばらく彼女を作らないのもいいかなと考えていたんだけど。

「まああれだけカツコ良けりや一度くらいつき合ってみたいよね。」

「そうですね。」

角田さんがそう答えたのが見えた。

そうか角田さんも僕と付き合ってみたいと思っているのか。

直接告白されたわけじゃないけど、そんな気分になった。

「今度は誰と付き合うのかな？」

「何か気合い入っているね。」

「でも社内の人とは付き合った事ないんですよ。」

そおそ、どうせ別れるのに社内だと後で何かと面倒になりそうだから
敢えて避けてるんだって。

心の中で頷いた。

「そんなの分かんないじゃない。今までたまたまでしょ。」

「どうかな？」

誰だか知らないけど僕の事少しは分かっているような発言。

「とにかく今日は皆がライバルなんだから気合い入れなくっちゃ。

なんだってあの顔で会社の一番の有望株だし、ねえ。」

「そうですね。」

笑顔で相槌を打つ角田さん。

それは君も僕を狙っているんだね。

なんか知らないけどちょっとワクワクして来た。

「じゃあ、とにかく今日の仕事は約終わらせないとね。」

彼女達の話が終わりそうだったのですぐさま身を隠し、仕事場へと

戻るのを見送った。

東城 健祐 28才、彼女達の話の通り、付き合っていた彼女とは先日別れたばかりだ。

自分でしゃべっているわけではないのに付き合い始めれば誰が相手かまで会社中に広まり、もちろん終わりを迎えても光の如く、この様にまた噂は広まっている。

人の口に戸は立てられぬと言言葉が浮ぶ。

しかし、今日の飲み会はこちらも楽しめそうだ。

角田 円未、君はどう迫って来るつもりだい？

2・飲み会

それからの僕は自分でも不思議なくらい、いつも以上に仕事が捗り、7時に始まる飲み会に30分遅れながらなんとか滑り込んだ。

いつもなら20人くらいだが今日はざっと見ても30人はいるような、それも女性の比率が高い。

見渡すと仲の良い小田がこっちに手を振っている。

僕も軽く手を上げて応えたがそこには座れそうもない。

さらに見渡すとなんとタイミング良く角田さんの隣が空いている。何人かの女子がこちらの動向を固唾を飲んで見守っているのが窺えたがそれには気付かないフリをしたまま角田さんの横まで進んだ。

「ここいい？」

彼女の隣にも女性が座っていたが僕は敢えて角田さんの方に向いて声をかけた。

少々驚いた顔をしたものの「どうぞ。」と言って置いてあった自分の鞆を座れるように避けてくれた。

一応反対側に座った女性にも首を垂れて挨拶もどきはしておいた。

「さあ角田さん、今日は楽しみにしているよ。」

心の中で僕は囁いた。

緊張しているのか、こちらを気にした風におどおどしているものの何も言っていない。

「あの、何飲まれますか？」

彼女が何か言い出す前に僕の横に座った女性が尋ねて来た。

「うーん、そうだな、角田さんは何飲んですの？」

まあ初めくらい話しやすいように僕から声をかけてあげるよ。

「わ、私ですか？オレンジマンゴーです。」

本当はビールを飲みたいところだが同じものを頼んでみる事にした。

「じゃあ俺もオレンジマンゴーで。」

「えっ？」

すごく小さな声だったが彼女が驚いている。

何で？俺が同じものを頼んじやいけないのか？

それとも自分と同じものを頼んだので喜んでたりするのかな？

頭の中でいろいろ思考が浮かぶ。

しかし横から飲み物を聞いてきた女性が

「東城さんてお酒飲めないんですか？」

なんだそれ、仕事終わりの一杯と言ったら酒じゃなかったのか。

もしかしてただのジューズ？

あつ、そうかそれも作戦か、飲めないフリで可愛い女性を演じているんだな。

勝手な想像が頭の中で膨らんでいく僕。

「いや、それじゃあ僕はビールで。」

さすがに仕事終わりにジューズはない。

こちらを向いていた角田さんに対して答えるように告げる。

「はい。」と返事をしたものの彼女はどう見ても動揺している。

慌てて近くを見廻し、空いたグラスを手取る。

それを僕の方へ差し出そうとした時、隣の女性が先に僕へグラスを差し出した。

何にも言わずにそれを受けとった僕。

角田さんのグラスを持った手は行き場を失い、宙に浮いたままだ。

「どうぞ。」

と隣の女性がビールを注いでくれるのをただ見守っている様だった。

「ありがとう。」

とお礼を言つと飲みほしたグラスにまたビールが注がれる。

そうしているうちに角田さんの手の中のグラスは役目を果たさないまま、彼女と僕の間置かれた。

「東城さんは今の時間までお仕事だったんですか？」

ビールを注いでくれた女性がささず話しかけてくる。

「ええ、まあ。」

相槌を打つとそのままたわいのない話を振り続けて来た。

僕がそれに曖昧に返事をしているうち角田さんは僅かにこちらに背を向けて反対側の男性と話し始めた。

わざわざこちらから隣に座ってあげたのだし、後は彼女がどう来るのか見てみよう。

そんな気持ちでしばらく流れに任せ、隣の女性が何だかかんだと話しかけてくるのをのりくらりと適当に合わせていた。

しばらくして席を立ちトイレに行ったであろう角田さんの席に彼女と同じ部署の端野さんが腰を下ろした。

「お仕事お疲れ様です。」

僕のグラスにビールを注ぐ彼女。

さつき出来上がった書類を庶務課に持って行った時、そう言えば彼女が対応してくれたのを思い出した。

「どうも。」

にこりと軽く頭を下げると端野さんの顔がみるみる赤くなった。

そうこうしているうちに角田さんが戻って来たが自分のいた席に端野さんが座っていたせいか黙って隣にいた男性の向こう側へ座った。

「チッ。」

心で言ったつもりが口に出ていたらしい。

両側の女性に同時に見られてしまった。

結局そのまま最後まで角田さんは僕の隣に戻って来る事無く会は終わってしまった。

その後の2次会ではあまりに参加者が多く2部屋に別れ、さらには僕と角田さんは別々の部屋。

お互い部屋移動をする事も無く、その日はそのまま家路に着いた。彼女の作戦が読めない僕はひどくモヤモヤしている。

3・振られたのは僕

それから2週間して庶務課と飲み会があると小田が言ってきた。僕にはまだ新しい彼女が出来ていない。

その間、僕は彼女の動向をそれとなく観察していた。

彼女はこの前の飲み会で隣に座ってにいた井野原に言い寄られていると小耳にはさんだ。

まだ返事をしていないらしい。

噂を聞いて自分がどうしてそう思ったのかわからないがホツとした気持ちと焦る気持ちが湧きあがってきた。

しかしその考えを無理やり消した。

僕は一体どうしたいんだ。

飲み会には僕と同期の那木 美華も来ていた。

小田は入社してから彼女を追い回しているがなかなかOK!を貰えないらしい。

俺から見ても出来る那木が小田にOK!するとは思えないが諦めずにアタックしている小田を羨ましくも思える。

それほど好きになれる人がいて。

飲み会の席はたまたまその那木と小田、それに角田さんに俺の4人。那木が角田さんに井野原の事を振ると彼女は顔を赤くしている。

その後も僕の目の前で那木は井野原を勧めてばかりいた。

「彼って部署内でも評判いいのよ。案外隠れファンも多いんだって。もったいぶってると誰かに持って行かれちゃうわよ。」

どうして那木はそこまで角田さんを煽るのか。

「そうですね。」

那木のことを信賴しているのだろう。

角田さんも最後の方はたまに頷くような返事になっていた。

何だろう。

苛々する。

いや、それよりもどきどきと焦る気持ち。

消したはずなんだけど。

何だか知らないがちらっと目の合った那木の口元が上がったような気がする。

「もったいぶってると誰かに持つて行かれちゃうわよ。」

帰り際、角田さんを送っていく事になった僕に耳打ちして来た。

彼女の言葉は理解しがたかったが心の中を覗かれたような気分だった。

この上なく居心地が悪くなる。

小田が那木を送っていくと言うのでそれなら僕が彼女をとっただけだ。

先ほどの気持ちをまたも無理やり抑えつつ井野原の話を振る。

「彼と付き合うの？」

俺にまで話を振られたせい、それとまた話を蒸し返したせい、一瞬顔が引きつったのが見て取れた。

そう、彼女は僕を落とすつもりのはず、この状況は楽しめるかもしれない。

そう思うとさっきまでの気分も上向きになった。

返事を返してこない彼女に僕はわざと

「もしかして別に好きな人がいるとか？」

と振ってみる。

わざわざこちらから告白しやすくしてあげたのだ。

何て優しい俺と心の中でしたり顔だったのはずだったのに、「好きな人はいない」と言う彼女はそれはそれは真剣だ。

ガラガラと何かが崩れる音が聞こえた気がした。

だから今は好きという感情を持てていない井野原と付き合うのに躊躇があるのだと小さな声で付け加えられた。

「じゃあ、俺と付き合ってみない？」

自分でも吃驚した。

なぜそんな事を言ってしまったのか。

好きな人はいない、そういった感情を持ていない人と付き合うのには躊躇があると聞いたばかりではないか。

なのに僕は少しの希望を持ってその言葉言った気がする。

しかしそれを知られるのは恥ずかしくて何でもない顔を作っていた。そして彼女は僕の告白を冗談としか受けてくれなかったようだった。

「私で遊ぶのやめてください。そんな人だってみんなに言いふらしますよ。」

笑いながら返されてそれ以上のすべを知らない俺。

彼女が俺を落とそうと迫って来るのを楽しむはずだったのに俺の方が迫って振られた気分だった。

4・ため息の理由

それからなぜだか4人で会う機会が増えた。

いままでは時々しか食事に行ってもえなかったのに那木が4人で行くならと断らなくなったのが原因らしい。

小田は那木と会えるのを素直に喜んでいる。

僕も小田に誘われるのを楽しみにするようになっていた。

前に振られ気分を味わった事は自分の中の出来事なので薄れかけている。

誰に知られたわけでもないし、角田さんももちろんその事に触れて来る事も無かったし。

ただ時々那木が僕を見て、もの言いたげに笑うのが気になった。

初めはそれほど気にならなかったのだが

「何か企んでいるのか？」

さすがの僕も那木の行動を怪しく思い尋ねた。

「何が？」

わざと分からない振りをしているのが見て取れる。

小田と付き合うわけでもなくこうして会うのは頻繁になってきている。

どうも何かあるとしか思えない。

険しくなった俺の眉間を見ながら悪魔のような笑顔が帰ってきた。

「楽しませてもらっているわ。」

何の事を言っているのだろうか。

意味を理解できない僕は

「何を？」と再び尋ねたが答えは返ってこなかった。

まさか角田さんに冗談にとられてしまったあの告白を彼女が那木に話しているとは夢にも思っていなかったから。

ただ回を重ねても角田さんが僕に迫って来る事はなかった。

というより、そんなことはもう忘れていた。

会社ではあいかわらず寄ってくる女性も多い。

前はそれを喜んでいた気がするのだが最近は時々うつとおしく思える事がある。

僕は彼女を作らないまま4人で会ったのがただ楽しくてしょうがなくなっていた。

タクシーの中。

小田が那木を送っていくので僕が角田さんを送っていくのが当たり前になっていた。

今日はいつもより酔った角田さんが眠そうにしている。

「着いたら起こしてあげるから寝てれば？」

もう何度も送って行っている彼女の家の道も覚えてしまっている。

「大丈夫です。」

そう言ったものの目が閉じかけているのを気合いで開けてはまた閉じかけると繰り返し返している。

「よければ肩を貸すよ。」

もたれやすい様に差し出してみたが会社の女性達に睨まれるだろうと軽く笑い飛ばされる。

二人以外に会社の人間はここには居ないのに何を言っているのだろう。

頑張っていたけれど、いつの間にか眠ってしまった角田さんは頭を揺らし窓の方へ頭をもたげている。

しばらくしてタクシーが左へ曲がると窓にもたげていた彼女の頭が俺の方へ傾いた。

初めは肩に着かない位置でゆらゆらしていたけれど自然に僕の方へ降りて来た。

彼女の家がそこに見えている。

「その辺をもう一回りしてもらえますか？」

思わず運転手さんにそう告げていた。

到着して声をかけると初めはうつろに返事をした彼女は僕の方に凭れていたのに気付くと飛び起きた。

温かった肩の温度が下がって行くのを感じて、寂しい気持ちが湧いてきた。

彼女と言えは慌てて財布を取り出しながら

「あれ？いつもより高くないですか？」

小声で僕に聞いてくる。

一応運転手さんに気を使っているのだろう。

「道が少し混んでいたから。」

寝ていた彼女には分からない様、嘘をついた。

いつも見送ってくれる彼女が見えなくなってから、そおっと自分の肩に手を伸ばす。

まだ少し彼女の温もりが残っている。

自分でも分からない深いため息が出た。

5・暴走

先週は4人で集っていない。

自分の方から小田に聞くのも躊躇っていた。

エレベーターが開くと那木が一人で乗っている。

なんで集まらないのかうまく聞けるだろうか。

変な緊張を覚えながら「久しぶり。」と声を掛けつつ乗り込んだ。

「何か先週会ってないだけで随分ご無沙汰の気がするな。」

当たり障りのない会話を振ったつもりだったが那木はこちらをちらっと見ただけですぐにはそれに対する返事はなかった。

「先週は円末ちゃんの相談に乗ってて。」

「どんな？」

思わずそう言いそうになったのを何とか飲み込んだ。

「ふうん、そうなんだ。」

聞きたくて仕方がないのを隠すには骨が折れる。

余計な事を口走りそうで力を入れて唇を閉じた。

その間にもエレベーターはどんどん目的の階に近づく。

那木はその続きを言う気配のないまま、チンと音がしてドアが開いた。

「今日井野原君に返事するみたいよ。」

こちらを向かずひとり言のように言った言葉を残したままドアが閉まる。

何処で？何時に？どんなふうに？

僕に聞く暇すら与えなかった那木。

なんなんだ。

どうにも苛々が治まらない。

だからってわざわざ聞きに行ったりできるはずもなく、結局俺は仕事を早々に終わらせ、今僕はなんと二人の跡をつけいた。

先に出てきた井野原はそのまま会社から少し離れた喫茶店に入って

行った。

離れた所から入口を見守っていると少し遅れた角田さんも吸い込まれるように入って行くのが見えた。

冷静になれば何をしてるんだろうと言う行為を自分でも自覚しながらその場を離れる事が出来なかった。

一体どう返事しているのだろうか。

もしも二人が手を繋いで微笑みながら出てきたりしたら俺はどうするつもりなんだろうか。

帰ってしまいたい気持ちが膨らむのにどうしても足がそこから動かない。

どれくらいたつたのだろうか。

ドアが開いて井野原とすぐ後から角田さんが出てきた。

俺の目は二人の手に釘つけになる。

良かった、繋いでない。

涙が出そうになるくらい安堵した。

しかし店の前に立ち止まった二人は微笑み合っていてそのうち彼女は彼に向ってお辞儀をしている。

僕には

「どうぞこれからよろしくお願いします。」

のお辞儀に見えた。

彼は笑って何か言っている。

彼女を恥ずかしそうにしながら頷いた。

井野原は僕の目の前でそのまま彼女を抱きしめた。

気がついた時には僕は井野原の腕を思い切りひっぱり、彼女から引き剥がしていた。

驚く二人に

「俺は認めない。」

大声で怒鳴っていた。

もう自分が何を言っているのかさえ本人が理解できていない。

冷静な井野原が

「もしかしてもう二人は付き合っているの？」

「いいえ。」

井野原の言葉に何か引っかけたがそれよりも彼女がきっぱりと返事をしたのも気に入らなかった。

もちろんそんな話など一度もした事ない。

「これから付き合っんです。」

断言して僕は一人勝手に答えた。

「えっ？」

驚いている角田さんに

「くやしいな。」

そう言つて井野原は帰っていた。

しばらく猛然とその後姿を見送り、彼が見えなくなってもただ立ち尽くしてた。

我に返ると傍で角田さんは何も言わず俯いている。

そこで気がついた。

自分が言つた事の重大さに。

二人が結局どうなったのかも分からないまま、僕は勝手な事を言い散らかした。

彼女に何と声をかけたらいいのか。

「ごめん。ほんとごめん。」

ただその言葉を繰り返すしかなかった。

6・GAMEの勝敗

「あの、東城さん？」

名前を呼ばれて顔を上げると彼女の顔が心なしか色づいている。

「ホントにごめん。何なら今から井野原に説明しに行こうか？」

もう支離滅裂な事になってきている。

「いえ、それはいいんです。」

さつきよりも顔が赤くなつて、声も小さくなっている。

当たり前か、急に僕が出て来て自分勝手に振舞つんだからきつと呆れかえっているのだろう。

急に気分がドンと落ち込んだ。

もう一度説明しに行かなくていいのかと確認した後、彼女が大丈夫だと言つのでお詫びに食事を奢ると4人でよく行く居酒屋に足を向けた。

向かい合つた彼女は先ほどから何も話さない。

井野原とどんな話をしたのか、これから付き合う事になったのか聞いてみていいものか迷っていた。

「あのつ、」

同時に話しまして僕は彼女に先を譲つた。

「どうしてあそこにいたんですか？」

ここまできたのだ僕は正直に話すしかないと思を決めた。

「那木に今日角田さんが井野原に返事をするって聞いて。ごめん、ストーリーみたいな事して。」

なんで僕はこんなに謝らなければならぬ事をしてしまったんだろう。

今更ながらに呆れる。

「いえ、そんなに謝らないでください。」

僕を慰めてくれるつもりか、角田さんは責める様子はない。

こんな事をしてしまった後なのにどうしても井野原にどう返事

をしたのか知りたい僕は覚悟を決めて彼女に問いかけた。

「彼には何て返事したの？」

ハツとした彼女は顔を染め、目を泳がせ、恥ずかしそうな表情をみせた。

「えつと、あのお、私は。」

とても言いにくそうだ。

女性がその表情をするって事はいくらなんでも察しがつく。

それ以上聞きたくなくて無理やりに笑顔を作って祝福したつもりだった。

「そう、よかったね。」

「私きちんとお断りました。」

同時に言葉を発しても角田さんの言った事はきちんと耳に入ってきた。

「断ったの？なんで？」

力の抜けた僕の口からはするりと言葉が出てきた。

角田さんは斜め下に目線を降ろしたまま答えてくれた。

「好きな人がいるんです。」

それを聞いて、井野原に断ったのを聞いてホッとしていた僕に上から重石を載せられたようだった。

それから僕は何を食べ、どんな会話をして店を出たのか覚えていない。

ただそこに彼女を置き去りにすることなくいつものように彼女とタクシーに乗り込んだ。

体の疲労がいつぺんにきて背凭れに体を深々と預け、明日ちゃんと起きれるだろうか、そんなことを考えていた。

「あの、少し眠ってもいいですか？」

遠慮がちな彼女の声にいいよと返事をする肩に軽い重みを感じた。横を向くと角田さんの頭が俺の肩先にちょこんと乗っている。

その瞬間僕の全身が心臓になったみたいにドクンと動いた。

彼女はそれに気づいたのか上目づかいこちらを向いて、その目がい

いですか？尋ねている。

その仕草に僕の心臓は止まった。

視界にかすかに入っていた彼女の子指にそおつと自分のそれを重ねたら彼女が指切りげんまんするみたいに子指を繋いでくれた。

君の好きな人って。

聞こうとしたら横から寝息が聞こえてきた。

僕たちの子指は繋がったまま。

離れないように握り直してから、静かに僕も目を閉じた。

明日は早く目が覚めそうだ。そんな事を考えていた。

6・GAMEの勝敗（後書き）

短編に近いお話になってしまいました（汗）

描写足らずな部分も多々あったと思いますが読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7776o/>

GAME

2010年11月24日19時35分発行